

中里 忠香(なかさと・ただか)

1、プロフィール

教職の傍ら、明治23年、当時地方にあっては稀有な活版印刷で郷土史を出版。東京の新聞社が全国に募集した詩で1位となったほか、県内各地の校歌作詞を数多く手掛けた。

<生没>

1865(慶應元)年12月 ~ 1940(昭和15)年1月28日

<代表作>

『向鶴』

<青森との関わり>

八戸生まれ。明治16(1883)年県師範学校(青森市)を卒業後、三八地方や青森市で教職を勤め、青森市で没す。

2、作家解説

郷土史研究者、作詞家、教師。

慶應元(1865)年、八戸藩権少義中里好相の次男として、八戸町(現八戸市)長横町に生まれる。幼い頃から父の私塾で学び、公立八戸小学校、同八戸中学校、明治14(1881)年県立八戸師範分校を卒業。師範分校在学中、北村礼蔵に就いて数学、漢籍などを学ぶ。青森市の県師範学校入学後は、弘前藩稽古館の学頭を務めた儒学者・黒瀧儀任(ぎとう)より漢籍と文学の指導を受け、文学的な才能を開花させた。明治16年師範学校卒業後、三戸郡育養小学校を皮切りに、三八地方の小学校や中学校などに勤務した。

明治23年、里香散士の筆名で、八戸の青霞堂より『向鶴』一卷を出版。八戸地方見聞録というべき郷土史で、当時としては地方では稀な、活版の書であった。内容は多岐にわたり、八戸藩主系譜を始めとして、その数62篇に及ぶ。

明治 34 年、県立第三中学校（8 年後に県立青森中学校と改称、現県立青森高校の前身）開校とともに転任、国語漢文、歴史、地理、修身、寄宿舎舎監として教鞭を取った。昭和 6（1931）年、同校の創立 30 周年記念の年に、同じ年月を勤務して退職するが、教え子たちの有志が青森市内に土地を買い、家を建ててあげたという逸話が残るように、生徒たちから慕われ尊敬された教師だった。

明治 36 年、東京の新聞社「万朝報」が全国に募集した「処世の歌」で、中里白香の筆名で作詞した全 10 連から成る作品が第 1 位となる。第三中学校と青森中学校の校歌、青中 10 周年記念祝歌の歌詞も手掛けた。また、城内小学校、川内小学校、荒川小学校、筒井小学校、県立水産学校（八戸水産高校の前身）、青森市立工芸学校（青森工業高校の前身）、下長小学校、三条小学校、私立山田高等家政女学校（現青森山田高校の前身）の校歌を作詞している。

昭和 15（1940）年 1 月 28 日、青森市大字造道字浪打において逝去。

3、資料紹介

○『向鶴』

図書

1890（明治 23）年 11 月 5 日

190mm × 130mm

八戸初の活版印刷による、郷土史。書名は八戸藩の家紋に由来し、八戸の青霞堂主人浦山汀翠の乞いを受けて、里香散士の名で著した。内容は八戸藩主系譜に始まり、土地変遷、人民移住、気候、風俗、風景、言語、経済など多岐にわたる。228 頁、定価 30 銭。